# 小川未明『赤い船』のモチーフをめぐる考察

重松　恵美

## はじめに

小川未明（一八八二年生～一九六一年没）の童話集『赤い船』は、一九一〇年（明治四三年）一二月、京文堂書店より刊行された。表紙には『おとぎばなし集　赤い船』、表題ページには『おとぎばなし集　赤い船』と記されているが、未明研究史において「最初の童話集」（注１）、「第一童話集」（注２）と位置づけられた著作である。

未明は今でこそ童話作家として知られているが、活動初期は小説作品が多く、『赤い船』以前に四冊の小説集を世に出している。また、第二童話集となる『星の世界から』が刊行されるのは一九一八年（大正七年）一二月、『赤い船』の刊行から八年後であり、『赤い船』と『星の世界から』の間には小説集や小品集など合わせて十数冊を刊行している。

そうした事情もあり、『赤い船』は未明童話の、いわば習作期の作品と見なされてきた。例えば、一般読者が手に取りやすい書籍として長年愛読されてきた新潮文庫の『小川未明童話集』（一九五一年）は、未明の大正・昭和期の作品を収録したもので、『赤い船』からの採録はない。ただし、「未明は『赤い船』所収の諸作品をその後の作品選集にはほとんど再録しておらず（略）未明自身の『赤い船』諸作への自己評価を察知することができる。」（注３）との指摘もあり、『赤い船』評価史には著者本人の意向が影響したと考えられる。

現在、童話集『赤い船』は、「名著複刻　日本児童文学館　第一集」の一冊（ほるぷ出版、一九七七年）として読むことが出来る。また、同複刻シリーズの第二集には未明が編集した雑誌『少年文庫　壹』（金尾文淵堂、一九〇六年／ほるぷ出版、一九七七年）もあり、こちらでは『赤い船』収録童話のうち四作を初出形で読むことができる。

そして、これら複刻版とほぼ同時期に刊行された『定本小川未明童話全集』（全一六巻、講談社、一九七六年～一九七八年）の第一巻には、『赤い船』から童話四作と童謡五作が収録された。また、一九七七年刊行の『小川未明集』（日本童話文学大系・第五巻、ほるぷ出版）の続橋達雄「解説」には、「後年の未明童話の展開を見るうえで、第一童話集『赤い船』の諸作品はたいへん重要である。したがって、そのすべてを収めたかったのであるが、近年、ほるぷ出版から『少年文庫・壹之巻』と『赤い船』が複刻された関係もあり、本書には童話四編と童謡五編を選んだ。」との記述があり、定本全集編纂時にも同様の理由から収録作が取捨選択された可能性がある。

一九七〇年代は未明童話が再評価された時期である。「若い世代により小川未明批判が起こったのは、昭和三〇年前後」（注４）であり、その否定的評価に抗うように未明作品は小中学校の国語教科書に収録されていた。（注５）「殿さまの茶わん」や「月夜と眼鏡」は一九五〇年代から教材として用いられ、「野ばら」は六〇年代から八〇年代まで定番の国語教材であった。そうした時期に編纂された定本全集において『赤い船』収録作品の大半が割愛されたのは残念なことと思える。複刻版の刊行がなければ事態は違っていたかもしれないし、これが未明全集ではなく未明童話全集であったことも理由の一つであろう。

なお、『赤い船』収録作のうち、定本全集未収録作は、後に『小川未明新収童話集』（全六巻、小埜裕二編、日外アソシエーツ、二〇一四年）の第一巻に収められた。新収童話集には『赤い船』以前の未明童話も収録されてお

り、編者巻末解説には「未明童話の初期形成を考えるにあたっては、本童話集の作品群に拠らなければならない。」との指摘がある。未明初期童話の研究の素地はようやく整ったといえる。

## 『赤い船』収録作と初出誌名

☆は本論にて言及する作品。
Tは『定本小川未明童話全集』収録作品。
Nは『日本童話文学大系』収録作品。

☆TN「赤い船」（初出誌『少女』）
TN　童謡五篇（初出誌『少年文庫』）
「白い百合と紅い薔薇」（初出誌『少年文庫』）
「月と山兎」（初出誌『少年文庫』）
TN「海の少年」（初出誌『少年文庫』）
「青帽探検隊」（初出誌『少年文庫』）
「馬と金持」
TN「電信柱と妙な男」
☆T「燕と乞食の児
☆N「天使の御殿」（初出誌『女子文藝』）
「花子の記憶」（初出誌『少女』）
「才治と大力源蔵」
「二郎と美代ちゃん」
「憐れな家鴨」
「お濠あそび」
☆「月の宮」
☆「お伽小説　森」（初出誌『女子文壇』）

『赤い船』収録作の初出誌が順次判明するにつれて、『赤い船』ならびに収録諸作品についての評価の見直しが進んでいる。例えば大木葉子（注６）は、「憧憬」の問題に関して「赤い船」「海の少年」「天使の御殿」を論じ、浪漫主義との関係から「燕と乞食の児」「月の宮」「お伽小説　森」を論じている。また、小埜裕二（注７）は、「赤い船」「お伽小説　森」の他、「海の少年」「花子の記憶」「天使の御殿」「月の宮」「燕と乞食の児」を「憧憬」の話と包括し、「〈憧憬〉をいだく人物の背景には〈孤独〉の感情が見られる。」と述べた。これらの作品は童話集『赤い船』の主要作として今後も検討の余地のある作品といえるだろう。

本論は複刻版『赤い船』（ほるぷ出版、一九七七年）を底本に用い、作中のモチーフを拾い集め、検討するものである。考察の対象とする作品は、「赤い船」「燕と乞食の児」「天使の御殿」「月の宮」「お伽小説　森」の五作品。作中に登場する生き物や木や花が、どのように描かれ、どのような役割を果しているのかを明らかにし、作品読解を踏まえて『赤い船』の構成についても考察する。なお、『赤い船』の作中モチーフについて大木葉子（注８）は、「理想世界の形象に作品を越えて共通するモチーフが用いられている点も特徴的である。具体的には「音楽」「月」「夕暮」「夢」「森」といったモチーフが繰り返し用いられる。」と指摘している。本論は各作品の個別モチーフを主な考察材料とし、共通モチーフには適宜言及するものとする。

また、近年の『赤い船』論は同書が「おとぎばなし集」と称された点に着目する傾向があり、各作品の初出時に付された「少女小説」などの角書きも研究課題として浮上している。本論は収録作の本文読解を主軸とし、未明作品研究の端緒として書かれたものである。ジャンルや角書きの問題に言及する紙幅のないことをお断りしておく。本論中、底本に付された漢字の読みがなは基本的に省略したが、適宜これを残し、引用文中にカッコ書きで示した。引用文の末尾には複刻版『赤い船』のページ数を記すものとする。

## 一　異国へ往還するもの（船と燕）

童話集『赤い船』収録作のうち、最も評価の高いのは表題作「赤い船」であろう。福田清人は『赤い船』複刻版解説（『名著複刻　日本児童文学館第一集　解説書』ほるぷ出版、一九七一年）の中で、「本の題としただけ集中ではもっともまとまった作」と述べている。（注９）

この作品において主要なモチーフは「オルガン」であり、「好い音楽」である。「貧しい家に生れ」た露子は、小学校で聞いたオルガンの音色に心を奪われ、異国への憧れを募らせる。

村の小学校へ上つた時、オルガンの音を聞いて世の中には、斯様（こんな）好い音楽のするものがあるかと驚きました。一頁

其時、露子は言ふにいはれぬ懐かしい、遠い感じがしまして、此の好い音のするオルガンは船に乗つて来たのかと思ひました。（略）

どんなに開けてゐる美しい国であらうか。どんなに美しい人のゐる処であらうか。而して其の国に行くと、至る処で良い音楽が聞かれるのだと思いました。三～四頁

この、露子の音楽への憧れは、第二章から第三章冒頭にかけて繰り返される。十一歳で村を出て「東京の或る家」で暮らすことになった露子は、その家の娘を「お姉様」と慕い、お姉様の弾くピアノを聞く。

ピアノをお弾きなさるお姉様が、すき透るお声で、外国の歌をうたひなさるお姿は、何時もよりか一層神々しく見えたのであります。八頁

こうした生活の中で、「船に乗つて外国へ行つたやうな夢」（九頁）を見ることもある。「外国でオルガンを習つたり。ピアノを聞いたりして、大層自分が音楽が上手に」なる夢である。露子はこの家で可愛がられているようだが、実の娘と同じというわけにはいかず、オルガンやピアノを習ったり弾いたりすることはないのだろう。ただ憧れだけを募らせていく。（注10）

そんな時（本文には「初夏（はつなつ）の或日のこと」とある）、露子は海辺で「赤い船」を見て、「自分も其の船に乗つて外国へ行つて見たい。而してオルガンや、ピアノや好い音楽を聞いたり、習つたりしたいものだ」（一四頁）と考える。そして、「赤い船」を見た翌日、露子は窓辺で「一羽の燕」と出会う。船が海を越えて異国へ行き来するように、燕もまた、異国から海を越えて来て、また異国へと去って行くものである。

明る日、露子は窓に寄つて、赤い船は今頃何処を航海してゐようかと思つてゐますと、ちやうど其処へ一羽の燕が、何処からともなく飛んで来ました。一五頁

「お前は、何処から来たの。」と露子が燕に話しかけることで、対話が生まれる。「幾日となく、太平洋の波の上を飛んで来ました。」と語る燕は、「赤い船」のことも知っているという。

「（略）ほんとうに其の晩は好いお月夜で、青い波の上が輝き渡つて、空は昼間のやうに明るくて、静かでありました。而して、其の赤い船の甲板では好い音楽の声がして、人々が楽しく打ち群れてゐるのが見えました。」一八頁

このように語ったのち、燕は「何処へか飛び去って」しまい、露子は一人もの思いにふけり、物語は閉じられる。

「好い音楽」というキーワードが作中何度も繰り返され、最後には、「可愛らしい頸を傾げて」露子を見つめる小鳥（燕）まで現れて、露子の純粋な心が作品全体を包んでいるようにも思われる。ただ、何かこの作品に足りない物があるとすれば、それは結局のところ露子が外国に行けないまま、音楽に手の届かないまま終っている点ではないか。「貧しい家に生れ」た設定から露子は最後まで逃れられないのである。

## 二　異国へ導くもの（燕と蝶）

では次に、「赤い船」と同じく「燕」の登場する作品として、「燕と乞食の児」を検討したい。「赤い船」は全一八頁、「燕と乞食の児」は一一頁弱と作品の長さに違いがあるためか、燕の登場の仕方はいささか唐突である。まず、「一人の乞食の児」が登場する。歳は十二、三で、「或る村」へやって来て、悪さばかりする。子供や老人をだまして食べ物やお金を奪ったため、村から追い払われそうになるが、また戻ってきてしまう。そして「或朝」、「乞食の児」の前に燕が現れる。以下、その朝の描写である。

或朝、乞食の児が森の中で目を醒（さます）と、頭の上で燕がかういつた。

「お前さんは私等の生れた故郷（くに）へ行く気はないか。暖かで奇麗な花が咲いてゐて、甘い果物が手の届く処にいくらも生つてゐて、誰も取り手がない。お前さんは行つて、其国の王様となる気はないか。」

九八頁

この燕は、どこかで「乞食の児」のことを見ていたのだろう。まるで神の使いか何かのようでもある。「暖かで奇麗な花が咲いてゐて、甘い果物が（略）誰も取り手がない。」という書き方は、明らかに「花」より「果物」に比重を置いている。「暖か」で「花が咲」くのは「甘い果実」が実るための前提条件である。「燕」の「故郷」には食べ物が豊富にあり、奪う必要もなく、奪われまいとする必要もない。「王様となる」というのは家来や国民を持ち君臨し統治するといった意味ではなく、大勢の仲間を得るという程度の意味であろう。

「乞食の児」は村で悪さばかりしていたが、それは食べ物を得るためであり、彼には寝床も屋根もなく、その生活は孤独であった。作中には描かれない彼の悲しい心の内を、燕は知っていたのではないか。

乞食の児はつくづく悲しそうに、己（おれ）にや金がないといつて泣き出した。すると燕はいたわつて、金なんかいらん。お前さんが行く気なら、燕と化て行くのだといつた。九九頁

こうして「乞食の児」は一夜にして燕に身を変じ、「南の暖かな国へ行つて王様とな」った。そして翌年から「毎年一度づつ、昔の村へ飛んで来」て、村の変わらぬ様子を眺めるのだが、村の人々は、彼が燕になったことを知らないままである。「今自分が燕となつてしまたのを誰も知つてゐる者がなかつた。」という結末の一文は、彼の一抹の寂しさと感慨とを示しているのだろうか。異国の楽園へ行くためには、何らかの代償が必要なのだろうか。

なお、「乞食の児が村に入つて来」てから燕と出会うまでの期間は、雪や寒気の描写がないことから冬でないことは確かであろう。冬の野宿を恐れたために「乞食の児」は燕にすがり燕に変じたとも考えられる。

未明の童話「つばめの話」（注11）には、「夏の初めになると、南の方の国から、つばめが北の方の国に飛んできました。」「秋も半ばを過ぎますと、つばめはどこにか、みんな飛んでいってしまいました。」とある。「燕と乞食の児」の燕は初夏に村へ来て、いつからかひそかに「乞食の児」を見守っていたのだろうか。動植物の描写は文芸作品において季節の指標となることがあるが、本作においては燕の他に季節を示すものが描かれない。それはつまり、「乞食の児」の村での生活が無味乾燥なものであったことを意味するのではないだろうか。

＊

一方、「天使の御殿」では、異国へ往来するものとして「蝶」が登場する。作品冒頭部を引用する。

雨晴れのした夏の日のこと、君ちやんが大きな庭下駄を穿いて裏庭へ出て見ますと、美しう咲いた紫陽（あぢさゐ）の花に一羽の奇麗な蝶がとまつてゐましたが、足音に驚いて、ひらひらと立ち上りました。

一〇二頁

「夏の日」とあるが、雨の晴れ間、紫陽花の咲くころであるから、初夏あるいは梅雨どきと言ってよいであろう。女の子（君ちゃん）が蝶に「お前は、何処から来たの。」と話しかけて対話が始まる点は、「赤い船」における露子と燕の出会いによく似ている。「遠い遠い、西の国から来ました。」と答えた蝶は、君ちゃんの更なる問いに答え、その国の様子を物語る。

「（略）私の生れた国は常夏の国と云ひまして、冬のない国で、春、夏、秋の間は菫や、蒲公英や、石竹や、薔薇や、菊の花盛りであります。野に行つても山へ行つてもよい香ひのする果物や、林檎や、何でもないものはありません。晩方になると天使（てんにん）が青々とした芝原の上でお月様を眺めて音楽を奏します。笛や、笙や、琴や、バイオリンを鳴らして互に手を取り合つて舞つたり、躍つたりします。（略）」

一〇三～一〇四頁

この蝶の生まれた国は、西国と南国の違いこそあれ、「燕と乞食の児」の燕の生国と同じく暖かな国で、花は美しく咲き、果物（食べ物）も豊かに実っている。スミレとタンポポは春の花、セキチク（ナデシコの一種）は夏の花、キクは秋の花。バラは四季咲きもあり春と秋に咲くと説明されることもあるが、ここは野ばらに準じて夏（初夏）の花としての扱いだろう。このように花の名前が具体的に出てくる点は「燕と乞食の児」との相違点であり、これは燕の対話の相手が男の子で、蝶の相手は女の子であることとも関係しているかもしれない。

さらに、蝶の国には美しい音楽があり、人々（天使）は楽しそうな様子である。月の美しい夜に人々が音楽を奏でて踊るところは、「赤い船」で燕が語った船上の人々の様子に似ている。「乞食の児」には暖かいことと食べ物に困らないことが何より肝心だったが、露子や君ちゃんの心を動かすのは美しい音楽と美しい人であるようだ。

「何（どう）かして其の御殿へ連れて行つておくれでないか」と頼む君ちゃんに対し、蝶は「快く承知」して、次のように言う。

山や、林や、海を越えて行かねばなりませんから、私と同じやうに蝶に化つて一しよにお出なさいと、蝶はひらひらと君ちやんの周囲を四五遍も飛んで羽についてゐる白い粉を振りかけました。すると忽ち君ちやんは、小さな美しい蝶になつてしまひました。一〇五頁

この蝶は偶然に君ちゃんと出会っただけの、普通の蝶であると思われるのだが、魔法のように君ちゃんを蝶の姿に変身させてしまう。私たち読者も一度は見たことのある、蝶の鱗粉。蝶の「羽についてゐる白い粉」が、そのような不思議な力を秘めているのだと想像してみるのも面白い。

さて、蝶の国へ行った君ちゃんは、「緋の袴を穿いて黄金の冠を蒙つて胸に銀の鏡をかけてゐるお姫様」と出会い、そのお姫様が「死んだ自分の姉さん」であることを知り、再会を喜び合う。君ちゃんは「御馳走」を食べ、「面白い音楽」を聞き、「楽しく遊んで」、時の経つのも忘れるほどであったが、ついに姉は「もうお帰なさいよ。」と言う。その帰途は行きと異なり、大変あっけない。

御殿の門まで（引用者注：姉さんは）お見送なされました。其処には先刻の蝶が用意をして待つてゐまして、お供をするのであります。またもや君ちやんは蝶の姿となつていつしか紫陽の花の上へとまつたかと思ふと、もはや自分の家へ来たのであります。

「左様なら！　ご機嫌よろしう。」といつて、君ちやんを其処に残して、蝶は一人何処ともなく飛び去つてしまひました。一一〇頁

これがこの作品の結末部であり、君ちやんは蝶の国（天使たちの国）から瞬間移動して自宅の庭へ戻っている。大人の読者であれば、これは一瞬の夢であったかと思うところで、しかし最後に蝶がひと言挨拶をして去って行くあたりに、いやあれは確かに見てきたことだと思わせるものがある。

蝶は「遠い遠い、西の国から来ました」と語り、その国は「海を越え」たところにあった。そしてその「西の国」で死者と再会するのだから、それは西方浄土と言ってよいだろう。異国というより異界というべき所に君ちゃんは行き、そして帰ってきた。「乞食の児」が燕の姿で村へ帰ってきたのとは異なり、君ちゃんは完全に元の人間の姿で、元通りの現実世界に戻ってくることが出来たようだ。

なお、この作品の面白さのひとつは、時間の経過の描き方にある。蝶の国へ行く時は、「高い山や、広い野原の上を飛んで、紅い海や、紫の海や、灰色の海をいくつもいくつも越えて」とあり、大変な距離を飛んでいるようだが、実はその日のうちに蝶の国に到着している。そして、蝶の国で過ごした時間についても、「楽しく遊んで時の遷（たつ）のも忘れてしまひました。」と、長い時間を過ごしたように書いてあるが、恐らくこれは夜に到着して深夜まで遊んで夜明け前に蝶の国を出立したのだろう。

「天使の御殿」におけるこうした描写は、一日という時間が子どもにはとても長く感じられる、ということを踏まえて、大人とは異なる子どもの時間感覚を描き出したものではないか。もちろん、ファンタジーゆえの時間感覚としてこれを楽しむことも可能だろう。一方、「乞食の児」が毎年一度、昔の村へ飛んでくるという結末は、彼が燕の時間感覚に取り込まれたということであり、生活の安定のためにある種の束縛を受け入れた、受け入れざるを得なかったと見ることも可能である。

「燕と乞食の児」と「天使の御殿」は、童話集『赤い船』のちょうど真ん中あたりに配されている。童話集の冒頭には異国を夢見る少女の物語（「赤い船」）を置き、中盤には異国（異界）へ往還する少年少女の物語がある。そして、この童話集の最後に並ぶふたつの作品（「月の宮」と「お伽小説　森」）は、異界へ行き、戻らなかった少年少女の物語であって、このような作品の配置には作者の確かな意図が感じられる。

## 三　森の恵みと村の生活（杉、栗、柿）

「月の宮」は少女を主人公とするが、貧しく孤独な子どもという点で「燕と乞食の児」と類似している。そのため、「赤い船」や「天使の御殿」の主人公とは異なり、その身辺に美しい物は見当たらない。

お花は（略）いつも眼の中には涙を湛へてゐて、破れた衣物（きもの）を着て、村の中を歩き廻つて落葉や、木の実など拾つて歩いてゐたのです。一七四頁

お花の叔母の家といふのは、余り富んだ家ではなかつたのです。家は村端（はずれ）の杉の林の中にあつてお花はいつも叔母に叱られると、晩方戸口に立つてしくしくと泣いてゐました。一七六頁

或時、嵐が激しく吹いて、（略）お花は叔母のために木枝を拾はされに出ました。衣の裾を吹かれながら、彼方、此方と歩き廻つて風呂敷に杉の落葉や、枯れた枝を拾つては入れ、拾つては入れしてゐました。

一八四頁

花子は「破れた衣物」を着ており、これは恐らく色あせているだろう。拾い集めるものも「落葉」や「枯れた枝」と地味なもので、焚きつけ用と思われるが本作中に暖かい炉端の描写は見られない。そして、ここで着目したいのは、林（あるいは森）に期待され得る豊かな恵み（注12）が描かれていない点である。お花の住む家（叔母の家）は「村端の杉の林の中」にあったというが、杉の他に村内に何の木があったのか作中では説明されていない。人々が長く暮らした土地であれば、生活の助けとなる樹木が何かしら植えられていたことだろう。作中、名のある木が杉だけなのは、その土地の植栽の特徴や季節設定の問題だけではなく、栗や柿を食べ、花や紅葉を愛でる生活とお花が無縁であったことを示唆していると考えられる。

お花は地上の生活に美しいものや暖かいものを見出せなかったからこそ、天上の月に救いを見出す。

お花はぼんやりとして、籠も、風呂敷包も其処に落したまま、一心に月の面ばかり見てゐました時に、お母さんが手招なされたかと思ふと、だんだん気が遠く遠くなつて、其の儘木の根に凭りかかりました。

一八六頁

其日から、下界ではお花の姿が見失はれたのでありました。　一八八頁

「月の宮」のお花は亡き母の面影を月に見て気を失い、月の宮殿（ごてん）で母と再会する。お花は母の元へ呼び寄せられ、救済されたように見える。しかし、「下界」では「姿が見失はれた」とされており、それは即ち地上での死を意味するだろう。

＊

では次に、「お伽小説　森」における「森」の描写を「月の宮」と比べてみたい。

お前は狐が出ても、狼が出ても怖しくはないか。（略）お前は、何が面白くて毎晩遊びに出るのだ。一九〇頁

妹は山で見て来た栗の話をしてゐる。紫色に熟つて、枝の先が撓んで下を向いてゐるのが目に見えるやうに物語つてゐた。姉は母に、今夜柿の皮を剝いてしまふなどと話してゐた。一九七頁

「お伽小説　森」では、「狐」や「狼」、「栗」や「柿」が話題に上り、「柿の葉が真紅に輝」く様子（一九一頁）や「こほろぎの泣き声」（一九七頁）も描写される。一方、「月の宮」の「木の実」は何の実か不明であるし、花も紅葉も描かれず、動物も虫も鳥も登場しない。

「月の宮」と異なり、「お伽小説　森」には、森の恵みが見て取れる。栗や柿の実る季節。冬が近いため、霜や雪を心配する様子も描かれるが、小太郎の父は「圃（はたけ）」（一九七頁）で働いており、家には「機（はた）の道具」（二〇一頁）もあり、「炉辺」（一九七頁）での家族の団欒もある。それなりに満たされた農村の生活ではなかろうか。

「狐」や「狼」が話題に上るということは、森にはネズミやウサギなどの小動物もいて、その餌となる植物もある。森の豊かな生態系が、人々の生活の背後にある。だが、小太郎は、その生活に充足することなく、ハーモニカの音色に誘われ命を落とす。

小太郎は、急に悲しくなつたやうに身を戦（ふる）はすと窓から飛び下りた。其の少年は、さも嬉しさうに小太郎に縋つた。二人は互に手を肩に組み合はして、ハーモニカを鳴らしながら、彼方の森の方へ行つた……　二〇六頁

其から一月経たぬうちに小太郎は病で死んだ。二〇七頁

「お伽小説　森」の小太郎は夜の森でハーモニカを吹く少年と出会い、その後、病死する。作中に森の豊かさや、家族の穏やかな暖かい生活が描かれることによって、小太郎がいかに強い力で音楽に惹きつけられていったかが了解される。森や農村という多くの生き物を養う場にいながら、小太郎一人が、ここにはないものを求めたのである。

「月の宮」のお花の場合は、そうした土地の恩恵が得られなかった。それは、両親を失ったためであり、叔母の性格的な問題や家庭の事情もあったのだが、その境遇はほとんど紙一重の、運命のいたずらとも言うべきものだっただろう。「近所の女房達（かみさんたち）は、いづれもお花の身の上を憐れみました。」（一七七頁）とあり、「お友達のお母さんが、お花の哀れな様子を見て、涙を落して」（一七七頁）とあることから、村じゅうが貧窮したり冷淡だったりしたわけではない。村とその周辺に豊かな自然があったとしても、お花に木の名や花の名を教える人はいなかったのかもしれない。

## おわりに

さて、ここまで、童話集『赤い船』に収録された五作品を読み解いてきた。「赤い船」や「燕と乞食の児」の「燕」、「天使の御殿」の「蝶」は、主人公と異国あるいは異界を結びつける作用を手助けするものである。「赤い船」の「音楽」や「燕と乞食の児」の「甘い果実」、「天使の御殿」の「紫陽の花」は、憧れの世界や憧れの人を象徴するもの。そして、「燕」「紫陽の花」は、季節が初夏であることを示す。「燕と乞食の児」の季節は明らかでないが、「燕」が飛来した時期とすれば初夏、「燕」が南へ去る時期とすれば秋と解釈できる。

一方、「月の宮」の季節は定かでないが、「落葉」や「木の実」のモチーフから秋。「お伽小説　森」は「栗」の実、「柿」の実で季節は秋、「これから山に雪が来る」、「此頃は晩になると霜が降る」との説明もあるから晩秋であろう。つまり、本論で考察した五作品に限って言えば、童話集『赤い船』は春から夏の明るい雰囲気の作を前方に据え、秋から冬の寂しい作を後方に配置したと言える。また、春から夏の場面では出会いが描かれ、秋から冬の場面では別れと死が描かれているというような整理もできる。

「赤い船」では露子が「お姉様」と出会い、「燕」と出会う。「燕と乞食の児」では「乞食の児」が「燕」と出会い、「村の人々」と親しむことのないまま別れることになる。「天使の御殿」では君ちゃんが「蝶」と出会い、「姉さん」と再会する。

「月の宮」ではお花が亡き母と再会して月へ行き、村から姿を消す。「お伽小説　森」では小太郎がハーモニカの少年と出会い、病死する。「月の宮」と「お伽小説　森」では、お花と小太郎を気にかけていた人々が、その後どれほど悲しんだことか。この二作は残された家族や親しい人々の抱くであろう喪失感を読者に想像させる結末部を持つ。

『赤い船』には様々なジャンルの作品が混在していると指摘され、それも確かにその通りで、そのためこの童話集には雑然とした印象がある。例えば、畠山兆子は「「青帽探検隊」には森田思軒の『十五少年』や押川春浪の冒険物語が、「天女の命令」には外国童話の再話的傾向が、また、「お山の兎」には昔話の反映が考えられる。」（注13）と指摘している。季節の問題にしても、秋の晩を描く「月と山兎」の次に夏休みの出来事を描く「海の少年」が配置されるなど、作品の掲載順に一貫性があるとは思えない。

一方、この童話集には既に未明童話らしさが刻まれていて、その未明らしさの最たるものは「憧憬」のテーマだと、先行論で繰り返し指摘されてきた。例えば船木枳郎は「未明の初期童話「赤い船」は後の作品に比べると、たどたどしさのあるものではあるが、すでに後年、彼の子供像として追求しつづける理解・同情の子供像であり、またそれは、美に憧憬する子供像でもあるのである。」と述べている。（注14）

藤本芳則は滑川道夫、船木枳郎、西田良子、桑原三郎、続橋達雄、畠山兆子の論を整理して、「『赤い船』所収作品のうち、「赤い船」には「憧憬」が描かれ、「情緒的」であることがそれまでの児童文学（＝お伽噺）と異なる、ということが共通して述べられて」いる、という。（注15）

確かに、未明研究初期には表題作である「赤い船」が特別視される傾向があった。そこで注目したいのが、童話集『赤い船』の構成の問題である。続橋達雄は「赤い船」と「お伽小説　森」を対比して、「露子の憧憬と小太郎の郷愁と、童話集『赤い船』は、巻頭と巻末の作品において、未明美学の二つの面を物語る構成になっている。」（注16）と述べている。

また、畠山兆子は「赤い船」初出時に「少女小説」の角書きがあったという続橋の指摘（注17）を踏まえ、「続橋達雄氏が指摘する通り、「少女小説赤い船」の初出判明の意味は大きい。これによって『おとぎばなし集赤い船』の構成が、収録時に外されたとはいえ巻頭に「少女小説」、巻末には付録と

して「お伽小説」の角書きをもつ作品を据えていたことが明らかになったからである。」と述べた。（注18）

本論は、童話集『赤い船』の構成の工夫は冒頭と中間部と末尾の三ヶ所にあると考えるものである。今回取り上げた五作品にはテーマや手法に類似点があり、これらが童話集全体をひと続きの世界観をもったものとしてつなぎとめる役割を果たしている。

童話集の冒頭に異国を夢見る少女の物語（「赤い船」）を置き、中盤には異国（異界）へ往還する少年少女の物語（「燕と乞食の児」と「天使の御殿」）、そして、童話集の最後には、異界へ行き、戻らなかった少年少女の物語（「月の宮」と「お伽小説　森」）がある。燕に象徴される南国への憧れと、夜の月、夜の森に象徴される彼岸の抗いがたい磁力のようなもの。夢見るように美しい海の果ての国と、寂しく恐ろしく逃れがたい雪国という故郷。しかしその、正反対とも見える二つの世界は実は表裏一体であるのかもしれない。童話集『赤い船』は収録作を個別に読解しつつ、作品集としての全体像を解明すべき著作であるといえよう。

**注**

（1）山室静「解説」『定本小川未明童話全集』第一巻、講談社、一九七六年

（2）小埜裕二編「年譜」『人物書誌体系45　小川未明Ⅱ　全小説・随筆』日外アソシエーツ、二〇一六年

（3）続橋達雄「小波と未明」『定本小川未明童話全集第一巻　月報1』講談社、一九七六年

（4）砂田弘「永遠の童心――その生涯と文学――」『小川未明文学館図録　小川未明の世界』上越市、二〇〇六年

（5）『読んでおきたい名著案内　教科書掲載作品　小・中学校編』日外アソシエーツ、二〇〇八年

（6）大木葉子「『赤い船』がもたらしたもの――小川未明『おとぎばなし集　赤い船』の位相――」『日本文芸論叢』第二四号、二〇一五年三月

（7）小埜裕二「おとぎばなし集　赤い船」『解説　小川未明童話集45』北越出版、二〇一二年

（8）大木葉子、前掲論・注6

（9）ちなみに、「赤い船」は岩波文庫『日本児童文学名作集』上巻（一九九四年）に収録されたために岩波文庫『小川未明童話集』（桑原三郎編、一九九六年）から「割愛」されたという経緯をもつ。『小川未明童話集』の編者解説には、「代表作の一つ、「赤い船」は既に岩波文庫『日本児童文学名作集』上、に収められているので割愛した。」とある。

（10）露子の東京での生活の実態は恐らく住み込みの奉公人であり、作品本文はそれを隠蔽しつつ、それと読めるように書かれている。先行論では次のような指摘がある。「なぜ、東京のある邸へ女中奉公に、と書かなかったのだろう」（奈街三郎「小川未明の場合――『赤い船』を中心として――」『児童文学読本』日本児童文学別冊、すばる書房盛光社、一九七五年）、「当代の言い方を借りれば「下女奉公」に出たものと考えられる。貧しい家の少女が他家に働くというのは、当時盛んに書かれた物語の一つのパターンであった。」（藤本芳則「小川未明「赤い船」の位置――童話集『おとぎばなし集　赤い船』の史的位相の再検討のために――」『大阪青山短大国文』第一〇号、一九九四年二月）、「露子が憧れを抱くのは、奉公人であったからでもあろう。」（小埜裕二、前掲論・注7）

（11）小川未明「つばめの話」引用は定本全集第一巻（前掲書・注1）による。初出は『読売新聞』一九一八年五月二四日～二八日。

（12）未明の故郷である高田の森について、高橋美代子は次のように述べている。「未明が書いているように、森を作っている樹木のなかで一番

多いのは杉である。（略）高田では、家・屋敷のなかに杉を植えることがごく普通のように行なわれていた。（略）高田は、旧藩時代に「榊原政令」を出して、家中屋敷に、うめ・もも・かき・くり・ぶどう・なし・りんご・などを植えるよう奨励したことがある。そのため果樹類も多く、この他、松・けやき・つばき・かえでの大木もあり、これらが混然と高田の森をつくっているのである。」（高橋美代子「小川未明の生い立ち」『小川未明童話論』新評論、一九七五年）

（13）畠山兆子「小川未明・童話作家への出発――「少年文庫」から『赤い船』へ――」『児童文学研究』第五号、一九七五年一一月

（14）船木枳郎「作品研究―ネオ・ロマンチシズム時代」『増補　小川未明童話研究』八木書店、一九六七年

（15）藤本芳則、前掲論・注10

（16）続橋達雄「おとぎばなし集『赤い船』論・序説」『野州國文學』第七号、一九七一年三月

（17）続橋達雄「未明童話集・目次（上）」『野州國文學』第四五号、一九九〇年三月

（18）畠山兆子「小川未明・初期作品に見られる創作意識――「オルガンの音色」から「赤い船」へ――」『梅花女子大学開学三十周年記念論文集』梅花女子大学、一九九五年